

教員サポート6
アカデミック・スキルズ
—— 少人数セミナーの指導法 ——

篠原 俊吾
Shungo Shinohara
司会 種村 和史
Kazufumi Tanemura

慶應義塾大学教養研究センター主催

教員サポート 6

アカデミック・スキルズ

—少人数セミナーの指導法—

2009 年 11 月 18 日（水） 16:00 ～ 17:30
慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 1 階 プロジェクト室 103/104 にて

Program

16:00 ～	はじめに・講師紹介	種村 和史
16:10 ～	講演「少人数セミナーの指導法について」	
		篠原 俊吾
17:00 ～	質疑応答	

講師

篠原 俊吾

慶應義塾大学法学部教授、アカデミック・スキルズ担当

1998 年慶應義塾大学文学研究科博士課程修了。専門は認知言語学。著書に「『悲しさ』『さびしさ』はどこにあるのか」(『認知言語学Ⅰ：事象構造』東京大学出版会)、「換喩と形容詞」(『レトリック連環』風間書房)。

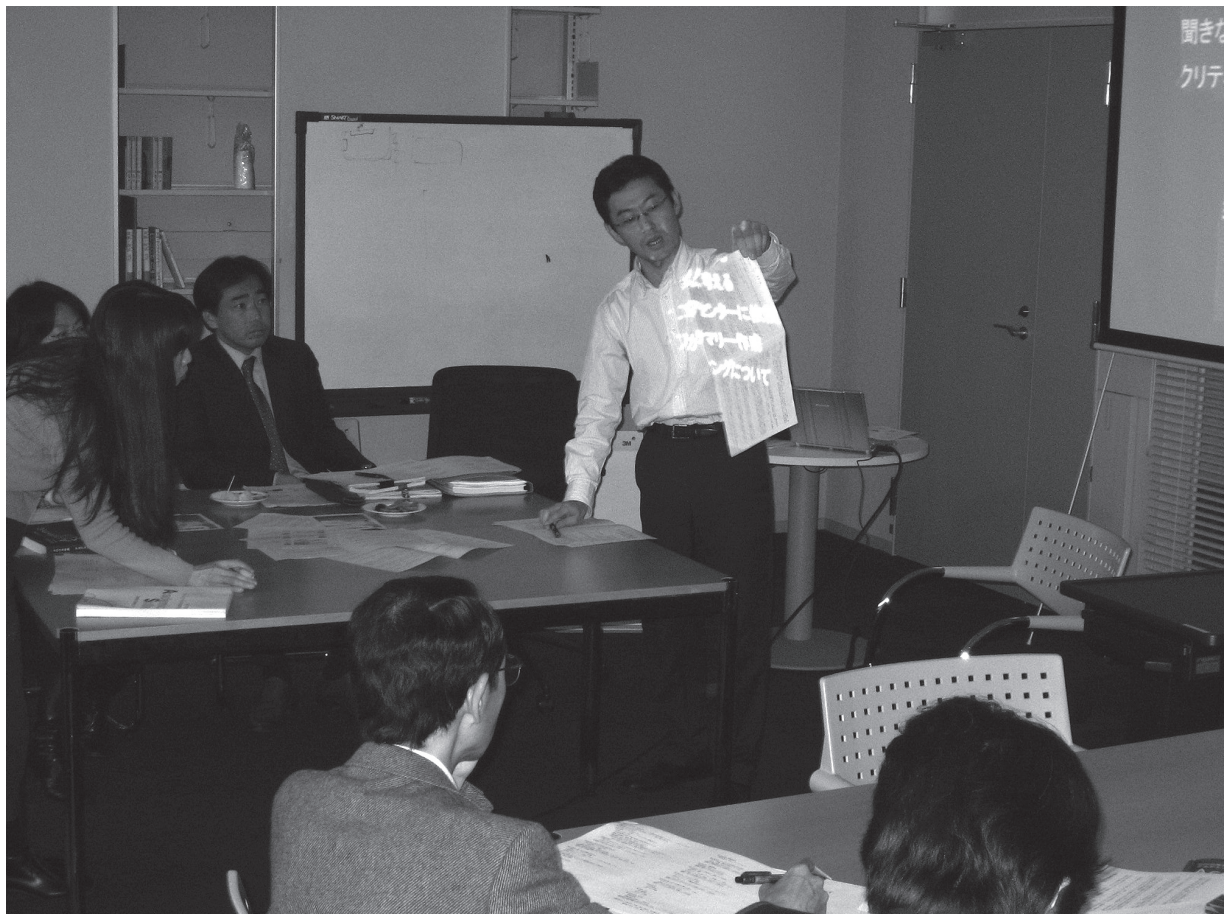
司会

種村 和史

慶應義塾大学商学部教授

2008 年～、教養研究センター副所長

専門分野：中国古典文学



はじめに

商学部教授 種村和史

本日は、ご多忙にもかかわらずたくさんの方にお集まりいただきありがとうございます。今回の教員サポートでは、教養研究センターの開講している「アカデミック・スキルズ」(略称「アカスキ」)の特徴と方法について、篠原先生はじめ、現在この授業を担当している先生方にお話しただこうと思います。「アカスキのノウハウを盗もう!」というのが、本日のテーマです。

多くの先生方にとって、「アカデミック・スキルズ」という授業は、遠巻きにして眺めている気になる存在なのではないでしょうか?

ご存じのとおり、この「アカデミック・スキルズ」は大学1・2年生にスタディ・スキルを教えることを目的に、教養研究センターが発足して間もない2003年というかなり早い時期に開講された科目です。文献の調べ方・レポートの書き方・プレゼンテーションの仕方など、大学で自律的に学習・研究活動を行っていくために必要なスキルを教え、十分な教育成果を積み上げてきました。たとえば、複数の教員が一コマを共同で担当し、それぞれの経験とノウハウを組み合わせながら指導を行っている、プレゼンテーション・コンペティションの開催や学生論文集の発行など、学生のモチベーションを高めるための様々な取り組みを行っている、初級クラスのほかに、より高度なスキル習得を目指して中級クラスを設置している、などなどこの授業のユニークな特徴は皆さんもお聞き及びのことと思います。

近年、大学における初年次教育の重要性が見直されつつあります。慶應義塾大学でも2005年のカリキュラム改革の前後から、大学1・2年生を対象にしてスタディ・スキルを教える少人数セミナー科目が各学部で数多く新設されました。その結果、日吉キャンパスでも自分の専門とは別にこの種のセミナーを担当する教員がどんどん増えています。私も所属する商学部で「総合教育セミナー」という授業を担当しておりますが、学生たちに大学で学ぶことの意味と方法を教えることができるこの授業はたいへん意義のあるものだと思います。学生たちが、苦労の末に問題を発見し、それを試行錯誤をしながら調査考察し、未熟ではあるけれども自分なり

の結論を導き出すという経験をし、その難しさを知り、またその楽しさに目覚める姿を目にするのはうれしいものです。このような授業を我々も学生時代に受けたかったな、と思ったりします。

そのようにやりがいのある科目ではありますが、多くの教員は学生時代そのような授業を履修したことがないために、いわば手探りの状態で授業の進め方を模索しているのが現状です。自分のやり方に今ひとつ自信が持てない、あるいはもっと別のやり方があるのではないかと、もっと効率的なやり方があるのではないかと、常々感じる人が多いと思います。そのような中で、早い時期から、確立されたメソッドによって着実な教育成果を上げている「アカデミック・スキルズ」は、気になる存在です。

しかし、かといって近づきすぎるのも剣呑である、話を聞こうと声をかけたら、深みにはまって授業の担当に引き込まれるのではと心配だ、どういうことをしているのか知りたいけれども、自分からアプローチするのは躊躇われるということで、気にはなるけれど遠巻きにして眺めている先生が多いのではないのでしょうか。かくいう私も、実はそのひとりです。

本日のこの企画は、そのような先生方のご希望をかなえるために立てられました。教員サポートという機会を利用し、この授業のユニークな指導法と蓄積された経験をご紹介いただこうと思います。皆さま、安心してこれまで気になっていたアカスキの詳細をじっくりお聞きください。そして、その中から様々なノウハウやヒントを仕入れ、ご自分の担当なさっている少人数セミナーで役立てていただきたいと思います。存分にアカスキのノウハウをお盗みくだされば幸いです。

アカデミック・スキルズ

——少人数セミナーの指導法——

篠原 俊吾

(慶應義塾大学法学部教授、アカデミック・スキルズ担当)

お忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございます。本日はアカデミック・スキルズに関してお話をさせていただくわけですが、この授業は始めから何か決まった形があるわけではなく有機体みたいなものであると私は考えています。常に新陳代謝を繰り返し、年ごと、グループごとにまったく異質なものが出来上がるので、組む相手によってどんな形になるのか、私たち自身がドキドキしながら毎年授業をしています。今日はその中でも、横山千晶先生、大出敦先生、不破有理先生、そして私、この4人で担当している水曜日の初級クラスの取り組みをメインにご紹介しながら、今日ご参加いただいている金曜クラスの徳永聡子先生を始めとするほかの曜日の先生方のお知恵も拝借して、どういう形で進めているのかを皆さんにお話しします。

ちなみにこの教員サポートのセミナー自体も、有機体のようなのだと私は考えています。つまり、この時間は、私たちから一方的に情報を与えるというより、ここで指導上の悩みなどを皆さんに挙げていただいて、その悩みを解決していくための、話題提供の場にできればと思っています。

アカデミック・スキルズの歴史

はじめにアカデミック・スキルズの授業目的についてご説明します。教養研究センターのホームページには「自ら考え、調べ、論ずることの体得を目指して、問題意識の喚起、具体的な問題発見に始まり、問題解決に至るまでに必要とされるさまざまな学問的・知的作業のためのスキルを身につけること」と書いてあります(図1)。具体的にどういうことをするかは後で申し上げますが、論文を書いたり、口頭発表をしたり、自分の思っていることを言語化して、相手に分かるように説明する、それが一番大事な作業になります。

本題に入る前に、この授業の歴史を簡単にご紹介します。ちなみに開講時からずっとこの授業を担当されている、歩くアカデミック・スキルズの歴史、横山千晶先生が本日いらっしゃいますので、詳しいことを知りたい方は、後で伺ってください。この授業は、2003年に「スタディ・スキルズ」という名称で始まり、2004年から極東証券寄附講座として正規授業化しました。極東証券さんは我々の最強サポーターです。毎年、多額の寄附をいただいております、この授業が存在するのは極東証券さんのおかげと言っても過言ではありません。

その後、2005年に「アカデミック・スキルズ」という名称に変わり、2006年にはアカデミック・スキルズのI、IIという形で開講しました。当時はIが初級編、II

が応用編でしたが2007年からそれを、Ⅰ、Ⅱが初級編、Ⅲ、Ⅳが応用編（中級）に分割しています。2009年現在、初級編のクラスが3クラス、応用編が1クラス、計4クラスが開講されています（図2）。

アカデミック・スキルズでは2005年に慶應義塾大学出版会より本も出版しています（図3）。この本を読めば、おおよそ論文執筆に必要な知識が得られるよう構成されています。この授業を履修した学生にはこの本を購入させ、論文の書き方、フォーマットが分からない場合にはこれを参照するよう指示しています。

アカデミック・スキルズは、ほかの授業とも大きく関係しています。『生命の教養学』は教養研究センターで開講している講義で、2003年から数多くの著名な先生をお招きして、毎年行われています。現在は切り離していますが、かつてアカデミック・スキルズは、この『生命の教養学』と連動させる形で授業をしていたこともあり、非常に深い関係があります。

アカデミック・スキルズを履修している学生さんは、かなり高い頻度でこの種の新しい実験授業に参加しています。たとえば、2007年、2008年、2009年に開講された新しい文学の実験授業、2006年、2007年、2008年の身体知の実験授業「体をひらく、心をひらく」そして、2009年の「体をひらく、言葉をひらく」など、多くの新しい講座に積極的に参加しているようです。

また、教養研究センターでは、東北公益文科大学と手を組んで、「庄内セミナー」で生と死の問題を考えると試みも行っていますが、アカデミック・スキルズの学生が多数この授業に参加して、ずいぶん活発に発言しているようで、ほかの学生から羨望のまなざしで見られていると聞いたことがあります。このようなところでもアカデミック・スキルズの成果が表れているのではないかと考えます。

また、このような取り組みが評価されたのか、2009年7月に朝日新聞系のウェブサイトのasahi.comから取材が来て「学生の満足度高い『アカデミック・スキルズ』」というタイトルで、紹介されたこともあります（<http://www.asahi.com/edu/university/toretate/TKY200907010185.html>）。ご興味のある方は、ご覧いただければと思います。

今やっている授業はこのあと詳しくご説明しますが、

授業の目的

「自ら考え、調べ、論ずること」の体得を目指して、問題意識の喚起、具体的な問題発見に始まり、問題解決に至るまでに必要とされるさまざまな学問的・知的作業のためのスキルを身につけること

（教養研究センターHPより抜粋）

図1 アカデミック・スキルズの目的

歴史

- 2003 「スタディ・スキルズ」という名称で開講
- 2004 極東証券寄付講座として正規授業化
- 2005 「アカデミック・スキルズ」と改称
- 2006 「アカデミック・スキルズⅠ、Ⅱ」が開講
- 2007 従来の「アカデミック・スキルズⅠ、Ⅱ」に加えて、応用・発展クラスであるⅢ、Ⅳを設置

図2 アカデミック・スキルズの歴史

出版物

アカデミック・スキルズ
大学生のための
知的技法入門

（慶應義塾大学
出版会、2005年）

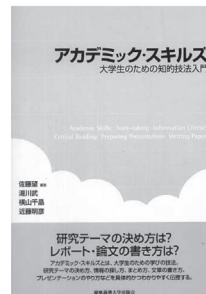


図3 書籍「アカデミック・スキルズ」

その前に今後の展開について少しだけ申し上げておきます。2010年度、新しく応用編のクラスとして、「メディア・リテラシー」というタイトルの授業が開講します。ご担当の先生（2名）はアカデミック・スキルズとは関係のない実験授業で共同で授業をされ、これは面白いという話になって、その企画をアカデミック・スキルズに持ち込んで下さいました。このように、ほかで生まれた知的プロジェクトをアカデミック・スキルズに持ち込み、育て、今度はそれを外へ発信していくという、外に開かれた場であることもアカデミック・スキルズのいいところだと思います。

ほかにも2010年度は、「慶應義塾大学の学生像はどうつくられてきたか」というタイトルで、三田会の歴史から始まって、文学作品の中に登場する慶應の姿、イメージなどの資料を調べ、みんなで考えるという授業も開講されます。さらに、2011年度以降に英語版のアカデミック・スキルズを開講できればと考えています。

アカデミック・スキルズの組織とサポート体制

それでは、実際に現在開講中のアカデミック・スキルズが具体的にどういう形で進められているかをご説明します。アカデミック・スキルズには、各クラスを担当している教員が3名から4名います。2009年度は水曜日の初級クラスは4人、そのほかの各クラスは3名、さまざまな専門分野の教員が担当しています。

もちろん単純にこれだけで授業が成立しているわけではありません。担当教員だけではカバーしきれないことも多く、ほかの方々にサポートしていただいています。これを図式化したのが図4です。真ん中の部分が一つの授業だとお考えください。

まず、図4の右上をご覧下さい。アカデミック・スキルズのほかの曜日の教員とはメーリングリストでつながっていて、何か問題があったときには、ここで話し合いながら問題解決ができるよう、情報が常に共有されています。

また、私たち3人、4人の教員だけでは学生のやりたいテーマをカバーすることはできません。必要な場合

は、各学部の教員にお願いして専門知識のサポートをしていただくこともあります。我々はフォーマットを整えたり、論文が論理的な構成になっているかを主に見ていくわけですが、本当の専門的な知識となると私たちも十分なアドバイスができないことがありますので、そういうところは各学部の先生にサポートしていただいております。

そして、アカデミックな部分ではないですが、事務面で絶大なサポートをいただいているのが教養研究センターのスタッフの方々です。スタッフの皆さんのサポートがないと私たちは一歩も前へ進めません。シラバスの問題から始まって、学年末のプレゼンテーション・コンペティションの準備まで、あらゆる局面でサポートしていただいています。それからもう一箇所、大変お世話になっているところがメディアセンターです。メディアセンターのスタッフの方には情報検索の授業をしていただいています。この授業は学生のみならず、私たち教員も学ぶべきところがたくさんあります。また、学生が何か調べ物をするときにはメディアセンターのレファレンスデスクに行くように指示していますので、その点でも大いに助けていただいております。

メディアセンターとの関係で言えば、アカデミック・スキルズは、メディアと協力して、ピア・メンターというシステムを新しく2009年度から導入しました。メディアセンターに「学習相談アワー」という時間を設け、アカデミック・スキルズで優秀な論文を書いたり、優秀な発表をしたりした、能力的に非常に優れた学生さんに実際にレファレンスデスクに座っていただいて、一般の学生さんの学習上の相談にのってもらう制度です。論文の書き方や、発表の仕方、何をどう調べたらいいかなど、仲間同士で語ってもらいます。教員にはなかなか質問はしにくいけれども、同じぐらいの年の仲間だと聞きやすいこともあると思います。これは、学生さん同士で問題解決をするという一つの試みで、今後も続いていくと思いますが、必ずしもアカデミック・スキルズ履修者である必要はありません。皆さん、ご担当の授業で素晴らしい学生さんがいたら、ぜひピア・メンターにご推薦いただければと思います。

このシステムのいいところは、ここに相談に来る学生

の利益になるのはもちろんのこと、ピア・メンターとして座っている学生さんの勉強にもなっているということです。

当然ですが、レファレンスデスクには相談員の学生さんだけではなく、メディアセンターのスタッフ、つまり情報検索のプロが座っていて、サポートしていただけますので、取りあえず学習相談アワーにレファレンスデスクに行くと、かなりのことが解決します。レポート・論文で困っている学生がいたらぜひお勧めください。

サポート部隊の話に戻りますが、ほかの強力なサポーターとしてアカデミック・スキルのOB、OGがいます。中級クラスの学生さんは初級クラスを終わっているの、初級クラス全体の流れをだいたい把握しています。同じようなテーマに取り組む学生が毎年いますので、初級の学生には、中級クラスの学生を紹介し、話をしてもらうようにしています。

全体としては各クラスの周りを囲むような形で、私たち教員だけではとても解決できない問題を皆さんにうまく解決していただいています。皆さんのこういうサポートがあって、初めてこの授業は成立しているわけです。

アカデミック・スキルズ授業内容

では具体的に初級の授業内容をご説明したいと思います。初級クラスは月、水、金と1クラスずつあり、計3クラスです。論文と口頭発表とは何かを学ぶ基礎クラスです。クラスはだいたい20名を上限として4月に選抜します。基礎を踏まえつつ各クラスに特色を持たせて、それぞれテーマを設けています。水曜日は「身近な知の世界を掘り下げよう、見る、読む、考える」というテーマでやっています。月曜日のクラスは恋愛をテーマにしてさまざまな議論をしながら進めているようです。金曜クラスは、春学期はディベートをやって、クラス全体を活性化する手法を採用しています。初級クラスは、どの曜日も基本を踏まえていますが、あとは各クラスの特色を出して、学生さんは自分の興味にあったクラスを選ぶことができます。

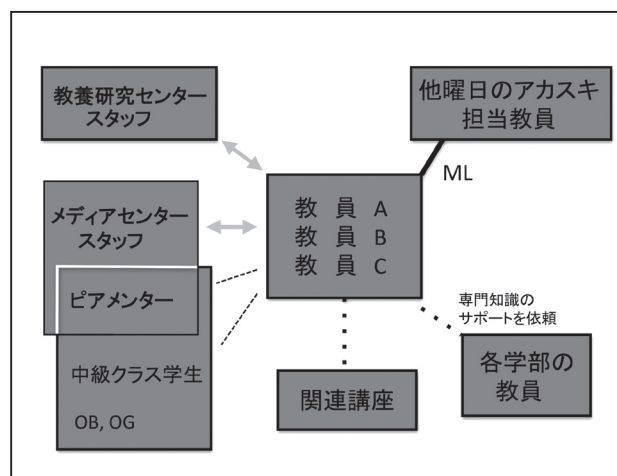


図4 アカデミック・スキルズの授業形態

アカスキを支えるサポート部隊

- ・各クラス3〜4名の(分野の異なる)教員が担当
- ・アカスキ他曜日担当教員(MLで情報を共有)
- ・各学部の教員
- ・メディアセンタースタッフ、ピアメンター
- ・教養研究センタースタッフ
- ・中級クラスの学生、アカスキOB, OG

図5 アカスキのサポート体制

授業の構成

初級クラス(基礎編、月、水、金、3クラス)

- ・論文、口頭発表とは何かを学ぶ基礎クラス
- ・各クラス20名を上限として、4月に選抜
- ・基本を踏まえつつ各クラスが特色を持つ

中級クラス(応用編、木曜日、1クラス)

- ・初級と同じく、4月に選抜
- ・原則として初級履修済みが条件
- ・毎年、あるテーマに特化
(「テーマを極める」、「講義を極める」など)

図6 アカデミック・スキルズ授業構成

応用編（中級クラス）ですが、2009年度は木曜日に1クラス設置しています。初級と同じく4月に選抜します。この授業にエントリーするには、原則として初級を履修していることが条件です。たまに初級を受けずにどうしても履修したいという学生さんがいますが、ドロップアウトしてしまうことも多いので、原則としては認めていません。中級クラスでも、毎年、テーマを決めています。過去の例で言えば「テーマを極める」「講義を極める」などです。2009年度は「人文的知を極める」で、いろいろなことをやっています。中級クラスに出ている学生さんの話では、先生方は、さわやかな笑顔で宿題をたくさん出すそうで、毎週私は泣き言を聞かされていますが、どうやらかなり鍛えられているようです。これをクリアできた学生はやはり、かなり実力がついていると思います。

アカデミック・スキルズ初級編

今日は初級編のみをご紹介します。まず最後に何が形として残るのか、ご紹介しておきます。その一つは論文です。春学期には4,000字の論文を書き、秋学期はその倍の8,000字を書きます。最初のうちはそんなに多く書けないと言っていた学生があつという間に規定字数をオーバーしてしまい、完成間近になると削る方に必死になります。逆にどうしたら自分の言いたいことをコンパクトにまとめられるかと。論文執筆指導の後半で私たちがやっていることの大半は、これを削り、簡潔にするということです。そのぐらい学生さんは書きたいことがたくさん出てきます。

さらに論文集を作るということが二つ目の大きな作業です。これは秋学期の履修者全員の論文が掲載されます。その論文集の中からさらに優秀論文を選出して表彰します。論文集作成にあたっては、学生で編集委員を組み、きちんと読んで編集をします。特に編集委員ですが、一回こういう作業を経験するとかなり実力がつきます。やってみるといかに提出を促すことが大変か、我々教員の気持ちもよく分かってもらえます。細かいフォーマットや規定をきちんと統一するなど、いろいろ学ぶべきと

ころがあつて、これをやった学生は、ほぼ全員がいい経験ができたと言います。

それから秋学期には論文を書きながら同時に口頭発表を行います。これは後ほど申し上げますが、授業中に短いプレゼンを何回もさせて、最後に全員が最終発表をします。さらにその中から代表を選び、その代表が2月にプレゼンテーション・コンペティションに出場します。教員も学生もここに向けてモチベーションを高めていきます。

だいたい最終的アウトプットは、今申し上げたようなことですが、ここに至るまでの段階で、どのようなことを行っているかを具体的に申し上げます。春学期は、基本的なスキルの習得です。これは各教員がミニ講義を少しずつ行い、課題を出してミニ講義をする、また逆に講義をして課題を出すというような、講義と課題の繰り返しになっていて、毎回何かしら課題を提出してもらっています。後で申し上げますが、この課題の提出が学生さんにとって、最大の問題です。これが提出できなくて苦しいと感じている学生がほとんどで、これが原因でドロップアウトしていくケースもみられます。

毎回課題を提出して、その後に講義を聞き、それから自分たちの書きたい論文のテーマ選択、リサーチを開始、最終的に4,000字の論文を書く、ここまでが春学期です。秋はいきなり自分たちのテーマを選択させてリサーチを開始してもらいます。その間、ミニ講義も合わせてやっていきますが、春で形にするという感覚はすでに身につけていますので、それをもう少し整理、洗練して見栄えのいいものにするために、早めにテーマ選び、リサーチに取りかかります。

先程申し上げましたように、秋学期は論文の執筆と同時に口頭発表もさせています。口頭発表は3分間の口頭発表が2回と、5分間の口頭発表が1回、最後に12分間の口頭発表をやってもらいます。論文も執筆していますので、学生の負担はかなりになると思いますが、これは相手の気持ちを考えたアウトプットとは何かを模索するいい練習になります。第1回目の口頭発表は、3分ですが、だいたいの学生は言いたいことを言えずに終わって悔しい思いをします。2回目ぐらいから少し整理して発表しようと思いますが、まだ考えがまとまらず、

言っていることが分からないと周りの人から指摘されます。苦勞しながら5分の口頭発表の段階に来ると、やっと言いたいことが伝わり始めます。このように何度も行ううちに、確実に表現力はアップしていくので、反復は大きな効果があると思います。

口頭発表の際には一緒に PowerPoint で資料なども作っていきますから、論文執筆とあわせると学生はかなり大変ですが、これによって相当実力がついてきます。最終的には1月に論文を提出します。2009年度は最終的に1月24日に提出することになっていますが、それまで推敲を重ねます。個人の最終プレゼンテーションは1月6日と13日です。ここでクラス代表を選出し、2月4日のコンペまで、クラス全体で代表のサポートをします。これが済むと今度は、論文集の編集です。これは基本的に学生に任せて編集してもらいます。おおよそ、このような順で進めていきます。

では具体的に私たちは、授業においていったい何を主眼に置いているかを今からご説明します。初級でまず最初に習得すべきものは、「問題を発見する」、「批判的に読む」、「批判的に考える」、それから「論理的に考える」、といったことです。情報検索についてですが、学生に検索をさせるとまず Google で検索をかけて、出てこない、そこであきらめてしまいます。メディアセンターの方に情報検索について講義をしていただくと、検索の奥深さにみんなショックを受けます。いかにいい加減な検索にひっかからずに眠っている情報がたくさんあるか分かり、我々教員もかなり学ぶところがあります。

メディアセンターで教えていただいた方法を応用しながら、学生は自分なりにどんどん情報を集め、まとめていきます。さらにそこから自分の論点を明確にして、論文にしていくわけですが、自分の考えがある程度まとまってくると、次に当然論文のフォーマットが必要になってきます。いろいろな書き方がありますが、まずは基本的な形を学びます。ここまでが春学期で主にやることですが、秋はこれに加えて口頭発表の仕方を学びます。それからビジュアルエイドの使い方、具体的には PowerPoint や配布資料など、どういう提示方法が効果的かを考えていきます。

本日の資料として配布いたしました春学期のシラバ

初級クラスの狙い(最終的な成果)

- ・論文を書く(春4000字、秋8000字)
- ・論文集を作る(秋、履修者全員掲載)、優秀論文を選出し、表彰する
- ・口頭発表(プレゼンテーション)をする(秋)
- ・(各クラスから代表を選抜して)プレゼンテーションコンペティションを開催する(秋)

図7 アカデミック・スキルズ初級編

初級クラススケジュール(概要)

<春学期>

- ・基本的なスキルの習得(数回のミニ講義)
- ・テーマ選択、リサーチ開始
- ・論文執筆

<秋学期>

- ・テーマ選択、リサーチ開始(数回のミニ講義)
- ・口頭発表(3分×2回、5分×1回)
- ・論文執筆、クラス内最終口頭発表(10分)
- ・論文集の編集・発行、プレゼンコンペ開催(2月)

図8 初級クラスのスケジュール

実際の課題とミニ講義(春学期)

- ・与えられた課題について意見を書く
- ・聞きながら問題を発見する
- ・クリティカルに読む、考える
- ・情報検索(メディアセンターに依頼)
- ・文献リスト、文献サマリー作成
- ・アカデミックライティングについて

図9 初級クラスの課題とミニ講義

スをご覧いただくと、実際に何をしているかがお分かりいただけると思います（図 10）。春学期は「与えられた課題について意見を書く」ということからスタートしています。まずは自分の意見をきちんと書けるようにということです。次に、「話を聞きながら、その中の問題を発見してみる」ということをやります。その後は人の文章を見て、それをクリティカルに読んだり、それを書き直すこともします。もちろん、この中には論理の話も含まれます。このあたりまで終わると情報検索のやり方を教わって、文献リストや文献サマリーを作って、最終的にはアカデミック・ライティングとはどういうものかを学生に学んでもらいます。

たとえば4月22日の授業では、「聞きながら問題を発見する」ということを行っていますが、これは横山先生に「歩くこと」について講義をしていただいて、それを聞いた上で、学生には歩くということについて、どういう切り口が考えられるかをいろいろ書いて提出してもらい、そして私たちがそれに対してコメントをつけて返却します。また、返却日には、この切り口についてのグループワークもあります。

5月13日の「クリティカルに読む」というところでは、外国人記者の書いた死刑に関するエッセイを題材に、この文章は何が論点か、何がおかしいのか指摘をさせます。さらにこの文章を書き直すとしたらどうやって書き直すかをグループで話し合ってもらって、実際に書き直す作業をしてもらいました。講評、ミニ講義の日には、学生さんの提出物をまとめて資料として配布しました。もちろん学生のよかったところは褒めてあげないといけないので、実際に提出してきたものの中で、よくまとめられている部分を配布プリントに載せて、ある一定の評価をしました。最後に私が思ったことをリライトしてみる作業をして、ここがおかしいのではないかということコメントしています。

それから、5月27日に大出先生がなさった授業が私には面白かったので、大出先生、それを少しご紹介していただけますか。

大出敦 要は簡単なことで、情報の裏を取るということです。学生はわりと安易に文章を書いてしまいます。

今どきですと Google で引いて、Google で一番ヒットしたものを頭から信じ込んでそのまま書いてしまったりします。インターネット上のは、結構、うその情報もありますので、しっかり情報の裏を取っていく癖をつけさせようと考えました。

テキストとしては2種類用意して、グループが4つありましたので、2班ずつ別々の課題を与えました。一つは『国家の品格』の結論部分、それからもう一つは『大帝没後』という明治天皇が亡くなった後に、精神的や文化的に混乱が起こったことを書いた本です。

学生には本文の事実関係が正しいか、資料を当たって調べて、本文の調べたところには全部、線を引くように指示し、さらに調査した文献は全部コピーをとり、その文献のどこを自分は参照したか、そこにもマーカーを引きなさいと指示しました。本文には事実誤認をしている部分もありますので、それを学生に指摘させることで、とにかく裏を取ることの大切さを体験させてみたのです。これによって学生が自分でレポートなり、論文を書くときにいかにしっかりと情報の裏を取らなければいけないかを自覚させようと思いました。かなりハードで恨まれましたね（笑）。

篠原 ありがとうございます。この部分は、学部生が十分に認識できていないところで、裏を取るのがいかに重要なことか、この作業を通してよく分かったと思います。

さて秋学期に入って、9月30日は、春学期の学生さんたちが書いた論文に対して、こういう点がまずかった、こういう点がよかったということを講評して、秋学期に備えてもう一度論文の書き方について振り返ってもらう目的で、1枚のプリントを配布しました。

先程申し上げた通り、秋は口頭発表の仕方を学びました。

10月14日は、プレゼンテーションに関するミニ講義をメディアセンターと協力して、公開講座の形で行いました。「プレゼンテーションの基礎」というタイトルで横山先生、「テーマの決め方・選び方」というタイトルで私が講義しました。公開講座としては、11月4日も「さまざまな論点のマッピングと要約」というタイ

2009 年度春学期 教養研究センター・極東証券寄付講座「アカデミック・スキルズⅠ」(水5) 前期のテーマ：身近な知の世界を掘り下げよう「見る・読む・考える」
授業計画（シラバス）
第1回 4/8（ガイダンスウィーク） 授業の概要、テーマの紹介、これからの予定、教員紹介など
第2回 4/15 導入：まず意見を書いてみよう テーマ提出→グループ編成 他
宿題1：与えられた課題について、意見を書く：〆切 4/19
第3回 4/22 聞きながら問題を発見する ①宿題1についてのグループ討論 ②宿題を基にしたミニ講義1（横山）：ノートを取りながら聴いてみる ③講義についてディスカッション ④テーマに関してコメント
宿題2：配布文章を読んで、コメント・書き換えを行う：〆切 5/2
宿題3：テーマ提出：〆切 5/11
第4回 5/13 クリティカルに読んでみる① ①宿題2をふまえたグループ討論 ②論理的・批判的に読むとは：宿題2を基にして（篠原） ③テーマの絞り込み（クラスを2グループに分けてコメント）
宿題4 配布文書を読み、まとめ、自分の意見を書く：〆切 5/2
第5回 5/20 情報検索① 情報検索① 担当：メディアセンター
第6回 5/27 クリティカルに読んでみる② ①ミニ講義：宿題4を基にして（大出） ②討論：宿題4をたたき台に
宿題5 最終的にテーマを決める：〆切 5/31
第7回 6/3 情報検索② 情報検索② 担当：メディアセンター
宿題6 文献リストを作る：〆切 6/7
第8回 6/10 テーマを決める、文献リストを作る ①宿題6 講評 ②個人のテーマに関してグループ討議／テーマ修正 ③文献リストの作り方（篠原）・データベースの作り方（大出）
宿題7 借りた本を読んでサマリーを作る：〆切 6/14
第9回 6/17 アウトラインを作る ①アウトラインの作り方（横山） ②Yes/No のテーマ・問題解決型のテーマでアウトラインを作ってみよう グループワーク

図 10 アカデミック・スキルズ水曜クラスシラバス

トルで横山先生が収集した資料を整理しまとめることを目的とした講義をなさいました。今後もメディアセンターと協力しながら、公開講座として、一般の学生さんにも聞いていただくということで、どんどん講座を増やしていこうと思います。

さらに PowerPoint の使い方も学んでおくことが必要なので、10月21日はビジュアルエイドの活用方法のミニ講義もしました。最後に口頭発表の実践です。11月現在、ちょうど授業で5分間の口頭発表を繰り返しているところですが、かなり上手にまとめてきています。ぴったり時間内で終わった学生もいました。春と秋、授業はこのような進んでいきます。

最終的な評価ですが、内訳は、出席が25%、提出物が25%、未提出、提出遅れは減点、最終論文は50%です。論文はどう評価するかというと、内容、書式、リサーチ

宿題8 自分のテーマでアウトラインを書いてみる：〆切 6/21
第10回 6/24 いよいよ論文を書いてみる ① アカデミック・ライティングについて（不破） ②感想文と批評文の違い（大出）
宿題9 ドラフト（2000字）を書く 〆切 6/28
第12回 7/1 ①文章添削 ②グループ討論
第13回 7/8 ①文章添削 ②グループ討論
第14回 7/15 まとめ ①個別指導 ②最終論文の作成へ（4000字）
最終論文の提出期限：7/18（土）23:59（予定）メーリングリストに流すこと
2009 年度 アカデミック・スキルズⅡ 秋学期 水曜日5限
第一回 9月30日 インTRODクシヨン 春学期レポート返却および講評（篠原）
宿題1「研究テーマを考える」次回までに400字程度にまとめる
第二回 10月7日 ①テーマの発表（ひとり3分） ②各自の発表に対するコメント
第三回 10月14日 ①ミニ講義 — 「テーマを決める、選ぶ」（篠原）[公開講座] ②ミニ講義 — 「プレゼンテーションの基本」（横山）[公開講座] ③グループ討論（自分のテーマをお互いに検討しあう）
宿題2「研究テーマを決定する」1000字程度にまとめ、10月28日に発表する
第四回 10月21日 ①ミニ講義 — 「プレゼンテーションの技術」（大出・不破） ②PowerPointの使い方実習
第五回 10月28日 研究テーマの発表（3分以内）
宿題3「研究のアウトラインをプレゼンする」PowerPointの発表資料を作成
第六回 11月4日 ミニ講義 — 「さまざまな論点のマッピングと要約」（横山）[公開講座]
第七回 11月11日 アウトラインの発表：前半 1人5分 同じグループのひとがコメント、司会を担当（合計10分）
宿題4「論文のひとつの章を書いてみる」締め切り11月20日（金）
第八回 11月25日 アウトラインの発表：後半 1人5分 同じグループのひとがコメント、司会を担当（合計10分）
宿題5「論文全体の草稿を作成し、その疑問点をリストアップする」締め切り12月9日
第九回 12月2日 ミニ講義 — 「引用の仕方、脚注のつけ方」（不破）
第十回 12月9日 ①グループごとにお互いの文章や形式を検討する。 ②個別指導
第十一回 12月16日 グループ作業・個人指導： リストアップした疑問点、問題点の解決法を探る。
宿題6 論文修正原稿を、12月30日（水）23:59までにメールで提出
宿題7 修正原稿をもとにプレゼンテーションの準備
第十二回 1月6日 個人プレゼンテーション（ひとり12分、質疑応答3分）
第十三回 1月13日 ①個人プレゼンテーションⅡ ②クラス対抗コンペ準備 ③レポート集作成準備
2月4日 プレゼンテーション・コンペ



度、文章力、論理力の5つの基準を設けて評価をします。たとえば3人の教員がいたら、担当を決め3人のうち2人が対象論文を読みます。2人で読むと事前に相談していなくとも、だいたい評価が一致します。たまにずれることがあります。ずれた場合はもう一人の先生に読んでいただいて、3人で話し合って最終的に結論を出すという方法で評価しています。

指導上のメリット・デメリット

ここまでは、授業の形式というか、どういう形で進めていくかをお話ししました。それでは、実際に教えていてどういうことが大変か、どういうポイントを重視して教えているかをこれからご説明します。最初に私たちが水曜日のクラスで一番注意していることの一つは、アカデミックな論文が今まで書いてきた感想文、散文と異なることを強く意識してもらうことです。裏を返せば、

やはり学生にはそのあたりの区別ができてないということです。感覚としては分かっているけれども、これが論文だということはまだよく理解できてないので、往々にして自分の意見をそのまま何の根拠もなく書いてしまったり、推測で書いてしまうところが多々ありますが、そういうところを捨てて、これは確実にアカデミックな論文だということを意識してもらえよう教えています。

今ご覧いただいている PowerPoint 資料に、「論文は自分の主張を証明するプロセスを示す場である」と書きましたが、これは『アカデミック・スキルズ』の本からいただいた剽窃です（笑）。やはり自分が何か主張したいことがあって、これはどうしてそう言えるのかを裏を取りながら説明をしていくことが一番大切なことです。ここを強く意識してもらえよう工夫しています。したがって論証に至るまでの情報収集をきちんとやって、どうしてこんなことが言えるか、すべてが結論に向かっているかどうか常にチェックしています。学生は、

自分が調べた情報をすべて盛り込もうとするので、焦点がぼやけたり、論点がずれたりすることがよくありますが、書いている途中のプロセスは、すべてが結論のためにあることを何度も言い聞かせて、そのために論証していくことを強調しています。

その過程で論点を明確にするということは、まず最初にできていないと困るのですが、意外とこれができるかもしれません。絞って、絞って絞り込まないといけないですが、ぼんやりと、500ページぐらい書く勢いで、広いテーマを持ってくる学生がかなりいます。それを絞り込んで本当に言いたいことは何かを学生と対話しながら共に考えていきます。本当に言いたいことはこれで、このためにはこういう資料が必要だというプロセスをきちんと教えるようにしています。

それ以前の問題として、テーマを決めたり、切り口を設定するために必要な、課題発見能力、問題解決能力を養うように、自分たちでいろいろ考え、作業をさせることも大事です。もちろん、すぐにこのような能力が身につくわけではありませんが、なるべくこれがつくように努力をしています。最近の学生さんについてよく言われることですが、課題発見能力がややもの足りない印象を受けます。何を見ても、別にという感じで、その中に問題意識が芽生えないことが多いと思います。何が問題なのかをしきりに私たちは問うたり、この中から問題解決にはどういう道筋があるかということを積極的に教え込むというよりは、そういうことを考えながら文献を読みなさい、書きなさいと促しています。それから学生同士でも話し合うように言っていますが、なかなか身につけるのが難しいところです。

あとはプレゼンテーションに関する部分です。ここでは人に分かりやすく伝えることをとことん追及します。やはり独りよがりのプレゼンや論文では、人には伝わりません。独断的になっている論証には、何となく言いたいことは分かるが、人には伝わらないとわざときつく言って、再考を促します。

さて、ここからは、教員間、対学生に対しての問題点についてお話しします。指導上の難点1点目としては、授業中、もしくは、まれに評価の際に教員間で意見の相違がみられることです。私自身は経験したことはないで

すが、過去には授業中、教員同士のバトルも何回かあったと聞いています。もっとも、学生は教員同士の討論やバトルは楽しいようですが……。そういう考えもあるのかと、いろいろな意見があることが学べて、学生にとっては楽しいのでしょう。最初に申し上げましたように、アカデミック・スキルズは有機体ですから、結論に至るにはいろいろな道筋があってもいいのではないのでしょうか。結論すらいろいろあってもいいと知るために、こうしたバトル、意見の相違は学生にはとてもいいことだと思います。一つの結論が決まっていって、そこにたどり着かないといけないと思うよりは、いろいろな考え方をしながら、さまざまな可能性を考えてもらえばいいと思います。

第2点目は、学生の興味は教員の知識の範囲を完全に超えているということです。私たちは言語文学系ですが、社会学系の問題を始めとして、多種多様なテーマが出てきてとてもフォローしきれません。そういうものは我々自身もある程度理解していないといけないので、それなりに勉強します。そういう意味では、我々自身の勉強にはなりますが、あるレベルを超えたら、担当者以外の先生方をお願いして、推薦図書などのお知恵をいただかなければなりません。

第3点ですが、よく最初にチームティーチングをしたときに皆さん思われることかもしれないですが、自分のやり方がほかの先生、学生に受け入れられるか、不安を感じると思います。やってみると大丈夫なことがほとんどですが、これが嫌でアカデミック・スキルズには入りにくいという先生はいらっしゃるのではないのでしょうか。

学生に対する難点の第1点目としては、着眼点が明確に見出せない学生の指導の問題があります。いろいろやりたいことはあるけれども、その中でどう問題を絞っていったらいいかよく分からない学生がいて、そこは指導の難しいところです。学生にはやりたいこととできることの間にギャップがあります。だいたいこの授業を履修する学生は、文章にある程度自信があって、自分がやりたいことは何でも書けると思っています。しかし、題材により論文になるものとならないものがあります。たとえば最近の学生は漫画やアニメがすごく好きで、こ

れをテーマに論文を書こうとしますが、資料がそろわなかったり、論点が絞り込めなかったりして、アカデミックな論文にならないケースがあります。そこで自分のやりたいことができないと途中であきらめてしまう学生もいます。このようなギャップに悩む学生にどう指導していくかは、大きな問題だと思います。

それから途中で力尽きて、これ以上続けられないという学生に対する対応も大きな問題です。最後まで頑張れと言いつけて、それについて来られる学生と、残念ながら途中で力尽きてしまう学生がいるのです。これを最後まですくい上げながらいくことは、至難の業で、我々にとっては、最大のネックです。これについては、後でまた解決策をお話したいと思います。

それから第3点として、提出物の期限が守れないということが挙げられます。私は企業の人にお会いすると必ず、プレゼンをするときに企業でどういうことに注意をしたらいいか聞くことにしています。そうすると、まず8割から9割の方は、「期限を守ること」とおっしゃいます。期限に間に合わないくらいなら、プレゼンの内容はだいたい、5割、6割ぐらいでいい、100%のものを作らなくてもいいと。だいたい新入社員が陥りがちな落とし穴は100%のものを作ろうと思って期限に間に合わないというケースです。期限に間に合わないことが会社の利益損失につながっていることが、まだ理解できていないというのは、新入社員にはありそうな話ですが、やはり今のうちから、期限に間に合わせることを社会人には大切であることを教えていくべきだと思います。

このあたりがかなり緩い学生が多くて、間に合わなくても平気な顔をしている学生がずいぶんいるようですが、我々は期限に間に合わなかったものは、一切評価はしません。とにかく期限までに提出すること、それまでに来なかったものは見ないと、最初から伝えて、厳しい態度で臨んでいます。学生さんにはやはりこれがきつくて、徐々に提出できなくなってくる学生もいます。我々としてもこれは、頭の痛いところです。

4点目は金曜日の授業の指摘ですが、学生の学習の負担量の調整ということです。課題を出すのはいいのですが、負担が大きすぎると学生も提出し切れないことが起こると思います。金曜日の先生方はさすがにそのあたり

はよくお考えで、うまく調整されているようです。我々は調整もせずに、やらせたりしていますが、金曜日の先生は濃すぎず、かつ学生が成果を上げられるような方法を発見することができるように努力をし、これができるれば教員としてのレベルが上がるのではとおっしゃっていました。確かにその通りで、ここは水曜クラスとして反省すべき点です。

課題がきついとドロップアウトがよく出ます。一人やめると、悪い連鎖がおり、何とかしないといけないと思っています。毎週課題が出て、しかも自分の頭で考えて書かないといけないので、意外ときついと学生は思っていると思います。

第5点目はクラスの時間帯についてです。アカデミック・スキルズは授業時間を5限に設定しています。なぜ5限に設定しているかということ、授業がしばしば延長になるからです。特に秋学期の口頭発表の時期になると話が長くなってきて、延びてしまうことがあります。これはどのクラスもだいたい同じ問題を共有していますが、授業が延びてしまうことは、教員も学生も熱意を持っているという意味ではいいのですが、学生にとっては迷惑だったりすることもあるとあって、このあたりの調整は課題の一つです。

第6点目は、学生との距離の取り方の問題です。これだけ密なので当然、学生との距離が近くなります。その中で、特定の学生と仲良く話すようになることもあります。どうしても濃淡はできますが、我々にはできるだけ一部の学生とだけ親しくならないように注意しています。これは中級クラスの指摘ですが、密な付き合いがあるが故に締め切りが甘くなり、締め切りに遅れてくるのが当たり前になってしまうと、その後、修復するのはなかなか難しいと思います。

チームティーチング

次にチームティーチングについてご説明します。ここは、私自身、アカデミック・スキルズを担当して、最もよかった点の一つです。

まず、何よりも、チームティーチングの最もよい点は、

教員一人当たりの担当学生数が少ないので、きめ細かい指導が可能になるところです。実際に20人ぐらいの学生を3人か4人で見てみると、かなりしっかりと学生の論文を見ることができて、細かいところまで指導できます。

それから第2点目として、複眼的、多角的に指導ができます。一人の学生さんの問題をほかの先生もいろいろコメントしますので、私が気づかないところにほかの3人が気がつくこともあって、これは教員にとっても、学生にとっても大きなメリットだと思います。

それから異なる分野の先生から指導法や視点などを学ぶと学生にとってはメリットになるのは言うまでもありませんが、教員にとってもメリットになります。自分一人でやっているとどうしても限界がありますが、いろいろな先生のやり方を見てみると、今まで自分にはなかった、欠けていたものが多く発見できて、今度はそれをこっそり自分の教室でやってみたりします。このようにチームティーチングによって、新たなやり方を学び、自分たちの教授法の幅を広げることができます。

さらに、同じ授業の先生方で話し合いをすることで、いろいろなことを学べるだけでなく、ほかの曜日の先生方と意見の交換も可能なので、この点でも学ぶことが多いと思います。実際に私が今回の資料を作るに当たって、金曜担当の先生、月曜担当の先生にいろいろな話を伺いましたが、そこでも、いかに私は自分のやり方がだめかを学び、勉強になりました。

また、自分が個人で思っていることが、いろいろな先生たちに通用するか不安になることがありますが、だいたいやってみると、これでよかったのだと思うことがほとんどで、自分のやり方が、ほかの分野でも通用すると確認できて、自信につながると思います。

もちろん、時々通用しないこともあります。昨年同じクラスを担当していた先生のおひとりが、提言の実現可能性にかなりこだわりをお持ちでした。私はそのあたりがかなり甘くていい加減にやっていたのですが、考え直さなければいけないと思い知らされた点があります。もうひとつ例を挙げると、横山先生も以前、共同担当されていた先生からアンケートの取り方について実際に学ぶことがあったそうです。

横山千晶 以前、共同で授業を担当していたこの先生は、スポーツ科学がご専門ですが、ご研究の基礎としてデータを正確に取るノウハウを持っていらっしゃいます。最近学生たちがリサーチの過程で、アンケートを取ることが多くなりましたが、アンケートの取り方、たとえばどういう質問をどのように聞けばいいか、私たちにはうまく教えられません。ところがこの先生の指導のおかげで、なるべく正確に、数値化できるアンケートを作ることにについて、そして質問と答え方についてもいろいろと学生と共に学ぶことができました。そういうことはやはりこの先生のように違う分野の方が教員のおひとりとしていたからこそ、共に教える自分自身が学べたことでした。

篠原 横山先生、ありがとうございました。私もアンケートを取ることがよくやらせますが、その話を聞いてからアンケートに注意を払うようになりました。このようにやり方が学べると、私たちとしても幅が広がります。時に通用しないこともありますが、これは裏を返せば、新たに自分にはないものが学べるということで、これは大きなメリットにもなると思います。

第3点は、多少不謹慎ではありますが、自分の得意としない領域はほかのメンバーに任せることができます。自分ができないことは、自分だけが担当しているクラスだと断念してしまいましたが、複数の教員であれば、たいがいのことはできてしまいます。一人で全部やるのはすごく大変ですが、分担すると、一人一人の教員の負担が軽減されます。それから必要に応じて専門知識を持っている先生と学生の仲介をしなければなりませんが、いろいろな先生がいると、窓口が広がるという点も大きなメリットです。

チームティーチングのメリットの最後に、講義を中心に行っている先生にとっては、少人数の学生と密な関係を築けるという点が挙げられます。語学の先生だと普段は同じ学部の学生さんということが多いと思いますが、他学部の学生さんと知り合えます。それから他学部の教員と接することができると、とても知識の点で役に立ちます。これを全体論で言えば、学部の枠を超えて、教養教育、日吉キャンパスにおける教育全体について考

えるいい機会にもなります。

逆に問題点ですが、仕事の配分などはバランスが悪くなることがあります。このあたりはうまく調整をしていかなければなりません。また、グループワークなので、お互いの意思疎通が結構大事になってきます。目的は一つで、そこに達するためのプロセスですので、それほど大きなずれはないと思いますが、担当者の考えはある程度、知っておくべきだと思います。いろいろな話をしますので結束力が強まることは確かです。

学生の反応——学生アンケートより

次に、学生にとってのメリット、デメリットですが、デメリットはあまりないので、メリットのみを申し上げておきます。まず第1に、学生同士で質問をしたり、意見交換をする機会が増えるので抵抗感が減るという点が挙げられます。これは小さいことですが、授業の活性化には、大きな意味を持ちます。

それから何度もグループワークがあるので、学生同士のフィードバックも多く、学生同士で問題をなるべく解決するようになってきます。また、本日のこの会場である来往舎 103/104 がアカデミック・スキルズの部屋ですが、ここはいい意味でのたまり場になっていて、ここが居場所という学生がいたりします。大学の中では意外と居場所が見つからない学生が多いようですが、ここが居場所となり、ここによく来て、ほかのクラスの学生と話したりして、いろいろな連帯感が生まれているようです。

実際に学生の反応は、皆さんに本日お配りした教養研究センター『Newsletter』14号にも書いてあると思いますので、後で詳しくご覧ください。2008年度は少なめですが学生22名からアンケートを取ってしまして、その結果をご紹介します。内訳は学部別に見ると法学部が10名、経済学部が3名、商学部2名、文学部6名、理工学部1名です。アカデミック・スキルズを履修して大変だったこと、ナンバーワンはやはり、期限を守って課題を定期的に提出することです。これが22名のうちの11名ですから半数の学生が困難であると

感じています（図11）。

次に、論文作成の段階でいろいろと苦しい、大変だと思った人が8名です。逆にこれがなぜ1番ではないのかと思いますが、別の見方をすれば、ここから、期限を守ることがいかに学生にとってきついことなのかがわかります。

学生にとって履修してよかったことですが、論文の書き方が分かった、プレゼンの仕方が分かった、このあたりが大多数を占めています。それ以外に知的な刺激を受けた、コミュニケーションができたとか、論理的な思考が身についた、文学的センスや創作力が身についたという意見もあります（図12）。

それからこの授業を友人、後輩に勧めますかということですが、22名中20人が勧めると答えており、圧倒的多数でこの授業は支持されています。この授業を一言で言う、「きついけど、やりがいがある」ということかと思っています（図13）。

今後の課題

——ドロップアウトを出さないために

今後の課題は、いろいろありますが、一つは学生の理想と現実のギャップをどう埋めてやるかです。やりたいことはあるが、それを形にできない、どういうことをやっていいのか、詰めていいか分からない、そのあたりをどうしていくかです。そして最後まで全員を船に乗せて目的地にたどり着くためにはどうしたらいいかを考えていくことが大きな課題です。

それから、システム上の問題点として、履修者は20人という制限をかけていますから、あまりたくさんの学生さんに履修してもらうことはできません。もしこの数をどんどん増やしていくと、当然ですが教員の数と授業の質の確保が大変になります。現在は各学部の先生にお願いして来ていただいています、学部の事情などもありますので、これ以上多くの先生にお願いして来ていただくのは難しい、こういう現実があります。それから当然、クラスが増えれば授業内容も統一したことができないので、授業内容の質の確保という問題もお

そらく出てくると思います。

また、これは横山先生からご指摘いただいた点ですが、学部はどうノウハウを持ち帰ってもらうかも課題の一つです。ここに来ていろいろなことを学んでいたいて、学部の先生がご自身の学部とそのノウハウを持ち帰り、使っていただくことが理想的だと思いますが、どういう形で持って帰っていただくかです。それから授業で悩んでいる先生をこのアカデミック・スキルズに引きずり込んで、幅を広げていただき、また帰っていただければと思いますが、学部としてそのあたりの問題点をどう解決するか、これはどういう仕組みでやりたいのか、我々としても悩みの種です。

さて、先ほど、ドロップアウトの話を何度かさせていただきましたが、次にこの問題の解決策についてお話をさせていただきたいと思います。ドロップアウトを出さないための事例紹介ということで、我々はグループワークを考えています。グループワークはいろいろなところでやっていて、その本来の目的は、学生の自発性を促進する、それから学生同士の相互作用を促すということだと思います。その例の一つを挙げてみましょう。

先ほど申し上げましたように、横山先生が「さまざまな要約とマッピング」というタイトルで講義をなさいましたが（図 14）、これは何をやったかという、5人程度の班を作ってもらい、1トピックの記事をさまざまな新聞から集めてきて、これを各テーブルに人数分渡します。各グループは、すぐにその場で分担してその内容を要約して、要約情報がそれぞれ出来上がったら班で共有します。その班の中で持っているプリントの要約を全員ができて、情報が共有できた時点で、この記事全体から論点を見つけ出し、その中の論点をうまくまとめていく作業をします。

まとめ方はさまざまで、5つの記事があったら5つの記事を順番に並べてストーリーを作るグループもいれば、5つの記事から同じようなキーワードをうまく並べながら立論するなど、いろいろです。班ごとに記事の要点を書いてもらって、最後に班の代表にそれを説明してもらいます。

これは何が狙いかというと、まずは記事に書かれている情報をきちんと整理し、論点は何かを見出すこと

学生へのアンケート結果(1)

Q. アカデミックスキルズを履修して大変だったことは何ですか。

- ・期日を守って課題を定期的に提出すること(11名)
- ・学期末論文の作成(テーマ3名、リサーチ3名、論文作成3名、すべて1名)(8名)

(教養研究センターNewsletter 14)

図 11 学生アンケート (1)

学生へのアンケート結果(2)

Q 履修して良かったこと、体得できたこと

- ・論文の書き方がわかった(11名)
- ・プレゼンの仕方がわかった(6名)
- ・知的な環境に刺激をうけた(4名)
- ・教員や学生同士のコミュニケーション(4名)
- ・論理的な思考能力(3名)
- ・文学的センスや創作力(1名)

(教養研究センターNewsletter 14)

図 12 学生アンケート (2)

学生へのアンケート結果(3)

Q この授業を友人後輩に勧めますか

- ・勧める(20名)
- ・勧めない(2名)

Q この授業を勧める方、後輩にひとこと

- ・きついけど、やりがいがある(14名)
- ・人生がかわる、教員とのふれあいに感動

(各2名)

(教養研究センターNewsletter 14)

図 13 学生アンケート (3)

です。さらに、その中から全体を見渡して問題点を発見することも大事です。これを 90 分の間にやるのでかなり忙しくなります。たまたま大学院生が来て、その大学院生とアカスキの OB が同じチームで作業をしたのですが、ものすごく質の高いものが出来上がりました。その一方で、これはちょっとというものもあっていろいろでした。

これは論文を書いていく上で、自分が集めてきた資料の論点は何かをまず整理しなければいけない、その作業の予行演習です。そしてこの中で自分はどのようなものを課題として見出せばいいのか、それを学べるのではないかと考えてやっています。横山先生、それでよろしいでしょうか。

横山 はい。実はこれは、私が所属する初年次教育学会の年次大会でのワークショップで実際に体験したものです。ここでは教員が学生になって実際に複数の記事を読み、要約し整理するという作業を行いました。その場で渡された記事を短時間で要約するときに、教員自身があせて何も書けないということもあって、私たちも学生の気持ちにあらためてなることができました。

篠原 ありがとうございます。こういうことをやると、グループの中でいろいろな話が出て、お互いに意見を言い合って自分たちを高め合うことができるようになり、それを何度も繰り返していくうちに、どんどん意見が言えるようになっていきます。このような作業を通してもちろんグループワークの狙いである、「自発性の促進」と「学生同士の相互作用を促す」という目的は達成できますが、実は、それが同時にドロップアウトにも効果があるのではないかということを金曜日の先生方からご指摘いただきました。

金曜日のクラスは、春学期にディベートをなさっていますが、だいたい 4 つのグループに分けて、対戦相手を変えてそれぞれ 2 回ずつディベートをさせています。テーマはグループ内で相談して決めて、候補を挙げて全員のディスカッションと投票で決定します（図 15）。

ドロップアウトを抑制する効果があるという話ですが、金曜日の先生から春学期にグループワークをさせる

事例(1)さまざまな要約とマッピング(水曜)

- ・ 5人程度の班を作る
- ・ 新聞記事を人数分配布
- ・ 分担して要約する
- ・ 班で要約情報を共有
- ・ 全ての記事の中から論点を見だし、まとめ、ホワイトボードに書く
- ・ 班の代表が意見をまとめて発表する

図 14 グループワーク（水曜）

事例(2):ディベート(金曜)

- ・ 春学期
- ・ 4つのグループ、対戦相手を替えてそれぞれ 2回ずつディベート
- ・ テーマはグループ内で相談し候補を挙げ、全員のディスカッションと投票で決定

図 15 金曜クラスのアプローチ (1)

金曜日クラスで学生の自発性や学生同士の相互作用を促すために留意していること

- ・ グループ分けの方法は、全員が納得できる方法をその都度探る
- ・ 学生の発言に対して、極力良し悪し(正解・不正解)の判断をしないこと(教員の考える正解を探るのではなく、自分自身で思考する姿勢が大切)
- ・ 他の学生が存在が、自分の成長に役立つことを伝える
- ・ 教員の態度がオープンであること

図 16 金曜クラスのアプローチ (2)

とクラスの団結力が強まって、秋学期の論文執筆にお互い積極的に意見を交換したり、助け合うようになるとご指摘いただきました。金曜のクラスでドロップアウトしたのは現在のところ1名ですが、これは驚異的です。だいたい3～4人、ひどいときは6人、7人と途中でいなくなりますが、1名だけしか落とさずにここまで来るとは、おそらくグループワークを行うことによって、お互いを支え合うようになったからと考えられます。

図16は金曜日の先生からいただいたコメントを元に作ったものです。3つ目の「ほかの学生の存在が自分の成長の役に立つ」ということはお分かりになると思います。それから「教員の態度がオープンであること」も、すぐにご理解いただけたと思います。最初の2点については、もう少し詳しい情報が必要だと思い、ご担当の先生にお話を伺ってみました。

金曜クラスはまずグループワークをするときに、最初の1カ月ぐらいはディベートをまだ行わず、短いグループワークだけなので、あまりグループごとで誰と何をやっても差が出ないことを学生に先に伝えておき、学生に納得してもらってグループワークをしたそうです。長い時間を付き合っていくグループを作る場合には、どういうグループを作るべきかをみんなで話し合う。そうすると、みんなが考えていることが見えてきて、その中からこの子とこの子と一緒にいいという手掛かりがだんだん見えてくると。これによってグループを決めていくと、うまくいくのではないのでしょうか。

なぜそれで効果があるかという、自分たちの意見を元に分け方を決めていく経験をすることで、この授業は教員が一方的に用意して進行させるのではなくて、受講者一人一人が自分の意見や思いを発言することで、その結果が授業にフィードバックされる実感と自信を持てる、自分が言えばこう動く、だから参加しようという、一人一人の参加意識が強くなるからだと思います。これによってかなりドロップアウトが減る、お互いの意識が高まることにつながっていくと思います。

結果的にディベートなどグループ内で受講者の主体的な働きを促進し、クラス全体が自立的に成長できる下地になるということです。実際に受講者から採点方法の改善などの要求があったりしたら、そこは現実的に動い

ていくということです。上から教員が押しつけるのではなく、自分たちが作っていくという、自分たちの授業だという意識が強くなると思います。後の論文執筆のときでも、お互いの助け合いなども積極的で、ドロップアウト抑制にもつながることになると思います。

それからもう1点、学生の善し悪しをなるべく判断しない。これも、担当の先生にお伺いしたことをご紹介します。教室で学生は無意識に自分の感情を押し殺し、眠い、大変そう、すごくできる子と一緒にいたい、気の合わない人がいるなどいろいろなことを考えます。ご担当の先生は、こうした感情を率直に出せないグループは経験的にうまくいかない指摘されています。特に少人数クラスではついついいい子になろうとしてしまうこともあると思います。こうした空気を変えるには、周りの人たちがどういう感情を持っているかをなるべく見えやすいようにしてやることです。そのために教員が初めから答えを知っていて、それを押しつけるような態度を取らないようにして、善し悪しもなるべく言わないことが大切です。そして自分でも気がついてない学生の気持ちを、どうくみ取ってやるかはすごく大事だとおっしゃっていました。グループワークを少し考え直すだけでも、学生がドロップアウトしない方に持っていけるのではないかという、一つの試みだと思います。

まとめ

最後にまとめに入らせていただきます。この部分は他力本願で、横山先生がお書きになられたものを、そのままいただいてまいりました。これは2006年12月に横山先生が『OPEN』にお書きになられたものです(図17)。「このクラスは教員と学生が効果的な学習方法とともに模索して行く場である」。私は最初にこの授業は有機体と申し上げましたが、学生も教員もみんなであれやこれや模索しながらいろいろなことを考えていく授業だということです。「同じクラスを担当する教員の考え方も、それぞれ差があるし、また同じテーマに対するアプローチの仕方も、見方も、学生と同じく教員にとっても違います。そこで教員はクラスの前後に話し合いを重ねるこ

とで、お互いの教え方を学び合い、よりよい教育方法を見つけ出していく基盤としています」ということです。

それからもう一つ「教室の中は常に教員にとっての学びの場である」ということです。さらに横山先生のお言葉を見ていくと、「学生の選んだテーマや問題提起と教員の意見が合わないときもあります。学生の発表に対して教員同士が異なった反応を示す場合もあるでしょう。クラスの中で、学生だけでなく、教員同士が意見を戦わせることもこの授業の醍醐味です。教員同士の熱いディスカッションを生で見ることを通して、学生は問いに対する解答は一つではないのだ。しかも解答に至る道は複数あるのだと実感するのです」とありますが、まさにこういうことを学生にも教員にも参考にしていただければと思います。

私の考えるアカデミック・スキルズはこういう形で、授業にいろいろな教員が参加し、いろいろな手法をアカデミックに持ち込みます。そこでいろいろな方法を試してみます。この中でうまくいったものといかないものがあると思いますが、その経験を踏まえて、さらにここで学んだことを自分の授業にフィードバックしていくことで、常に循環していけば、教員の幅も広がり、アカデミック・スキルズ自体もどんどん大きくなって、奥行きのある授業になっていけるのではないかと思います。私はこれを循環型授業と呼んでいます（図18）。

もう一つ、たとえばアカデミック・スキルズを担当しているお二人の先生が公開講座で実践された授業を、これは面白いと思って、アカデミック・スキルズに持ち込み、新たな講座を作る、これも新しい形です（図19）。

教室の中は常に教員にとっての学びの場です。学生の選んだテーマや問題提起をめぐって教員の意見が合わないときもあります。学生の発表に対して教員同士が異なった反応を示す場合もあるでしょう。クラスの中で、学生だけでなく、教員同士が意見を戦わせることもこの授業の醍醐味です。教員同士の熱いディスカッションを生で見ることを通して学生は問いに対する解答はひとつではないのだ、しかも解答にいたる道は複数あるのだと実感するのです。（横山千晶『OPEN』2006年12月号より抜粋）

図17 『OPEN』2006年12月号より

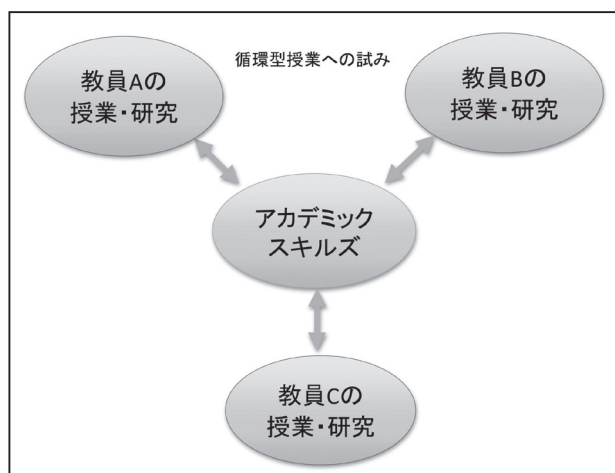


図18 循環型授業への試み

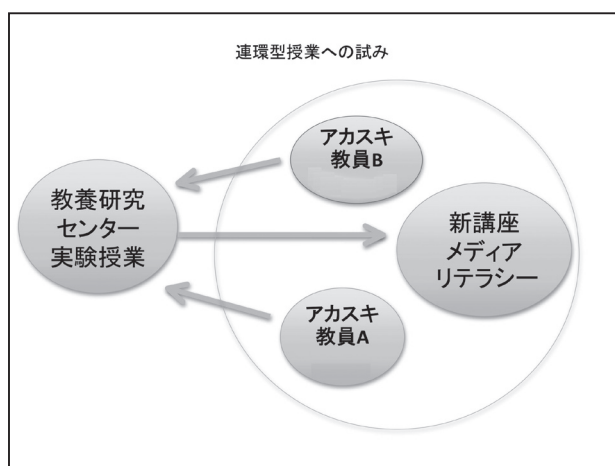


図19 連環型授業への試み

質疑応答

A 学生にグループワークをさせると、個人差が出ると思うのです。いわゆる、「ただ乗り」する学生が問題になりますが、その一方で、やる気があって、責任感があってどうしようもないから頑張っている学生を見ていると情けなくて、こっちの方が申し訳ない気持ちでいっぱいになりながら見ているのですが、どうすればいいのでしょうか。

篠原 一般社会と同じで、複数の人間がいると必ず働かない人がいますね。

徳永聡子 アカスキでは、比較的そういう丸投げ傾向はないです。でもディベートでまったく発言できない学生もいて、でもそれはだめということではなくて性格もあるので、そのまま受け止めています。

不破有理 最終的にグループワークというのは、そこでの理解とか、そういうものがぶつかり合う場としてのグループワークなので、それなりに何か得ようと思うところがあるのではないのでしょうか。論文で自分が書かないといけないことは決まっているので、自分自身について言ってくれる、何かを得られるのがグループワークというか。

B 「ただ乗り」の話ですが、これはどこでも経験することだと思いますが、ただ乗りを防ぐために1グループ何人ぐらいが適切かということも、いろいろなご意見があると思います。その点、アカスキでは5人だとか。

篠原 そうですね、1グループ5人ぐらいですね。

B 5人でどうですか。今までの経験で、たとえばこれが仮に4人だったら違いそうかとか、実際にやってみないと分かりませんが、皆さん、このアカスキだけではなくほかの授業での経験からも、何人ぐらいだとほとんど仕事をしない学生が出てこないとか、そういうことはありますか。

不破 ほとんどしないというのは（笑）。チームを組ま

せて2対2だからと言っても、一方が全部やってという学生がいるので難しいと思います。

篠原 私が学部で担当しているクラスでは、学生間でよく喧嘩になります。学生2人で、片方が仕事をしないと私にクレームを言ってきて、結局、それでペアが解消になったりすることもあります。2人でもだめなときはあります。

B 確かにそうですね。私の経験だと4人か、5人かで違って、5人だと1人が遊んでしまうことが結構あって、4人ぐらいだと比較的うまくいっていることがある気がします。4人で2人、2人で仕事をさせて、また4人全体でディスカッションをさせたりはします。これも簡単な問題ではないと思いますし、どう組んでも、必ず遊んでしまう学生は遊んでしまうと思いますが、その中でもどちらがましかなと感じています。

それからもう一つ、遊ばない仕掛けということで、ディベートのように競争になれば、遊ぶ割合が低くなるということがあります。経験的にもそうですし、私が担当しているクラスでは、グループごとに授業の報告をさせて、私が1回、添削したものをウェブに上げて、それに対して学生に投票をさせます。それも結局競争ですが、そういう仕掛けを入れることによって、少し緊張感を高めることもありかなと。ただ、それがいつもうまくいっているとは言いませんが、少しでも彼らにそういう点でやる気を出させる仕掛けはいろいろ可能性があると思います。

徳永 実はディベートをやっているのは2年目ですが、去年、アカスキの生みの親の一人である先生と、私と初めてディベートの試みをしまして、春学期ではグループワークでうまくいきましたが、秋学期には、グループワークがなかなかうまくしきれないことがありました。論文の個人ワークになったので、それをどうつなげるかが今年の課題でしたが、去年感じたのは、秋学期は教員の話すことが増えてしまって、教員同士が意見を戦わせている中で、学生が取り残されてしまうところがあったので、私は講義を学生にさせています。基本的に学

生が授業を進めるというやり方も一つかなと思います。ただ、それで自分の力が尽き果てしまったので、今年から調節をしました。

B 今のお話は、たぶん究極的に自律的学習とはどういうものかということで、一部の極端な教育学者が提唱しているように、自分たちで全部組ませて、学生たちに互いに教えることの全部をやっているグループもあるようです。私自身はそういう経験はありませんが。私たちが、その場に一番適切なあんばいで、どう授業を行うかというのが問題かなと伺いました。

それから、先ほどの教員研修の話もそうですが、学生のこういうアカスキなども含めて、その眼目はどうやって自律的学習者を育てるかだと思います。教員がその点で非常に重要なのは、自分たちがそれをやってみる。自分たちが学習者の立場に自分を置いてみて、もう1回学

習を考えて、自分は学習者としてどのように自分を展開できるかという、その経験を積むというより、引き返すと言った方がいいかもしれませんが、学生に対してそういう場を提供すると同時に、教員自身がお互いにそういう場を提供する仕組み作りは非常に重要だと思います。私自身も教員として研修などに出てみると、すごく緊張しますし、実際の作業を通して学べることはものすごく多いので、そういう場作りが非常に重要だと思います。

横山 ある程度、チームティーチングをやっていると私たち教員も学びます。学生の気持ちになります。

B 以前に、お互いの授業を見学しようという企画がありました。たぶん見ただけではあまり勉強にならず、授業を見てその後に、見させてもらった先生とディスカッションの場を持つことが絶対に必要だと思います。



す。私は残念ながら、私の授業を慶應の先生が見に来てくれたことは1回もないのですが、他大学の先生とか、院生とか、編集者は今まで何人も私の授業を見てくださって、そういう方に後でレポートをもらったり、時間のあるときにはその後すぐにディスカッションすることがどれだけ勉強になったか分かりません。そういう場が必要だと思います。

横山 ここにいらっしゃる方、アカデミック・スキルズをやりませんか。本当に手を挙げてほしいです。ここに参加してくださることを学部が認めてくださることが一番いいのですが。それを働き掛けてくださらないかと思います。この授業はすごく学ぶことが多いですよ。やめられなくなります。

C 先ほどの学生のアンケートの中で、2名が勧めないとありました。また、学生の何人かがドロップアウトしているとありましたが、こういう学生はなぜそこで勧めないのか、なぜドロップアウトしてしまうのでしょうか。

横山 はい。勧めない理由は、やりがいはあるけど大変だ、だから簡単に勧めることはできないということが全員一致した意見です。

C こんなことをしてほしいというフィードバックがあるんですか。

横山 一つは先ほどおっしゃったように、どうしても課題をどんどん与えてしまうので、ドロップアウトがでてしまうのです。そこをうまく考える必要があると思います。ただ、やめそうになっている学生さんたちを教員は支えようと努力します。気持ちが通じて一度やめてしまった学生が戻ってきたケースもあります。そういう学生はかえって伸びたりします。一人の教員では支え切れなくとも皆で協力して学生を育てることができるからです。ただ、最終的にやめていった人たちに対してのフォローアップはまだやってないですが、それは絶対にやる必要があると思います。

C 本当に学生が自立してくると、この授業では嫌だ、私はこういう授業をしてほしいということにはならないですか。

横山 それはあります。自分の見方があまりに確立してしまっていて、なかなかまわりが見えなくなってしまう場合がそれですね。やる気のある学生ほどいろいろな多角的に手を広げがちです。私たちが今、与えられた時間ではそれができないから、もっとテーマやアプローチを絞るようにしむけることがあります。そうすると、やはり反発して途中でやめてしまったことがあります。しかし、そういう学生がもしかしたらゆくゆくは伸びるかもしれないし、指導の仕方は難しいです。

篠原 学部のアンケートも、最後まで残った学生さんのアンケートを見るよりも、途中でドロップアウトした学生さんのアンケートの方が、それは私たちにとってはずっと役に立つと思います。

D 私は高等学校の教員です。塾高の場合、3年生で必修授業として卒業研究があって、1年間かけてゼミ形式の授業をしているのですが、それでレポートを提出させています。大学の先生皆さんにお伺いしたいのですが、そういった論文を書くことにはアカデミック・スキルズということが必要になってくるので、それは早いうちに、大学に入学する前に触れさせておいた方がいいものか、あるいは高校では基礎学力が十分に持たせることに専念し、スキルの習得は大学の方で引き受けますというもののなか、私にはよく分からないのです。一般的には高校の時点では何か作品を作り上げる、それに伴うリサーチをするためのトレーニングはしてない学生が多いと思うのですが、そのあたりを含めて早期学習は必要なのか。

E アカスキではないですけど、経済学部で少人数セミナーというのをやっています。4月から私の授業ではPowerPointで発表させますが、今年、最初にやった学生が塾高の学生で見事なPowerPointを作ってきました。外部から来た学生はPowerPointの使い方も分からなかつ

たのが、最初の発表を見て、ものすごく感化されて、その後の学生もきれいに作れたので、たぶんその授業を受けていた学生ではないかと思いますが、聞いたらそういうことを高校でやっていたそうですので、こっちとしては本当に助かりました。

D 各担当教員で、何を求めるかは多少違いますが、論文を書くだけではなく、多くの場合、中間発表ということで、現在各自が調べていることを他者に伝え、シェアする時間は、あると思います。

篠原 高校からやってきていただいたら我々もすごく助かります。たとえば論理的に考える、裏を取ってくるとか、別に高校1年生ぐらいでも十分できると思います。どんどん書いていると自分の書きたいことをコントロールして書けるようになるので、それは大事なことです。こういうことは長年の訓練だと思います。我々も1年ぐらいやったからといって、すぐによくなることはないので。何年もかかって書いていくうちにうまくなると思います。

D 私は今年担当してないのですが、自分が以前担当していたときは、出来上がりはどうであれ、そういうプロセスを経ることは生徒の将来にとって、とてもいいトレーニングになると思いました。大学でも、社会に出て、自分の考えを文章で、あるいは口頭で人に分かりやすい形で伝えることが求められる。そのためにはちゃんと説得力を持った材料を用意しなければいけない。今やっていることは、きっとすごくためになるんだと当時は生徒を洗脳していました。今、お話を聞いて、生徒がこのような授業を通して学んでいくことは、これから先に生きていく上で普遍的に役立つのだと思います。

横山 一貫校との校内連携は、慶應ではなかなかできていないので、一緒にそういったことを考えていければと思っています。

篠原 そのうち優秀な学生に来ていただいて、大学生に気合を入れてもらうとか。

D 塾高では毎年、卒業研究で優秀論文を選んでいきます。うちは専任教員が100名あまりいますが、毎年約50名が卒研を担当しています。ですから、50講座あり、それぞれの講座で最優秀論文として、各教員が選んで、それらを上下巻の冊子にして、図書室と学内で閲覧できるようになっています。そういうものを見ていただく機会があればいいですね。

篠原 そのあたりも有機体ですから、どんどん連携させてつながっていくとすごく面白いと思いますので、よろしくお願いします。

横山 よく言われるのは、高校と大学初年次ではそんなにアカデミック・スキルズにギャップはないはずだ、ということです。外国語教育もそうですが、高校と大学の間に大きな溝を作ってしまうこと自体、本当におかしい話なので。実際に教養研究センターで行っているいろいろな実験授業にも外部から参加してくださる小中高の先生方がいらっしゃいます。実は教育の現場ではギャップがあっては絶対にいけないはず。教員や学生さんたちの行き来は大いにあるべきだと思っています。

D そうですね。私としては、そのようにつながれたら生徒のためになると思います。

F 私の英語の授業でも、英語が大嫌いで1回目のアンケートのときに、典型的な塾高出身ですと書いた学生がいました。何か紙で出してもらったときに裏紙を使っていたのですが、裏紙を返してみても、これは経済史の授業かと言ったら、これは高校の社会のレポートで使った資料ですと、自分で調べましたと聞いてすごくびっくりして感心してしまったことがあります。ぜひ頑張ってください。

B 一貫校との連携をぜひ進めたいし、進めないといけないことだと思っていますが、ただ地理的条件があって、やはり我々日吉キャンパスにいる人間としては、一番やりやすいのがここの塾高、それから普通部ということで、そのあたりは学年にあまりこだわらないで教育が



できたらいいと思っています。もちろん文科省で決めた枠がありますので、そこは守らないといけないですが、その枠からはみ出た部分は、中高大の教育で何かいろいろなことをこれから一緒にやっていけたらと思っています。

それからこれはインフォメーションですが、外国語教育研究センターではアカデミック・ライティングというのをやっていまして、毎年大学生だけではなく高校生も論文を出してくれます。ここ数年間、所長賞は出てなかったのですが、去年所長賞が久々に出まして、それが実は SFC の高校生でした。大学生と院生をおさえて所長賞を獲得したのです。それもまったく帰国生ではなく、日本で普通に育って SFC で英語を学び、ライティングも SFC で勉強した学生です。その生徒は特別に優秀だったのかもしれませんが、審査員のイギリス人の先生が見てびっくりしていました。SFC の英語の先生に問い合わせをして、この学生が本当に自分で書いた

のかまで確認を取った程でした。その前の年は優秀賞か何かで所長賞が取れなかったもので、リベンジで出したということでした。

司会 いろいろな話題で盛り上がっておりますが、時間になりました。本日はお話しいただいたアカスキの指導法を、私も当初のもくろみどおりうまく盗んで自分のセミナーの指導に役立てられるよう、かえってもう一度おさらいしてみたいと思います。有意義なお話をありがとうございました。

慶應義塾大学教養研究センター主催

教員サポート 6

アカデミック・スキルズ

—少人数セミナーの指導法—

2010 年 3 月 31 日発行

編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター

代表者 横山千晶

〒 223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1

TEL 045-566-1151 (代表)

Email lib-arts@adst.keio.ac.jp

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

©2010 Keio Research Center for the Liberal Arts

著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。

ISSN 1880-3628

ISBN 978-4-903248-27-1

